

⑬片野重脩と旧片野家住宅

重脩（じゅうしゅう）さんと呼ばれ慕われた片野重脩。片野家は横手城の搦手城代・向家の配下で、明治の頃には横手有数の大地主でした。大正11年に横手町長、翌年には秋田県会議員に当選。川俣清音が落選した昭和5年の総選挙で代議士となり、2年後の総選挙では秋田2区トップ当選、横手町長にも再び咲きます。次の総選挙には出馬せず政治の世界を離れます。その選挙で清音はトップ当選。なんの地盤も靴も看板もない青年が、一躍国政の場に躍り出ること！無産政党の活動家としては秋田県では初めてのこと。

⑭幻の画家 橘小夢

大正から昭和にかけて活躍した画家。横手城代戸村家家臣の家に生まれ、代々、横手城御蔵番や御納戸役として根岸下町を住まいとしていました。竹久夢二と並びアンニユイな女性を描く挿絵画家として知られていましたが、独特な幻想的で妖しい美しさ漂う女性を描く画風が軍国主義の世相と相容れず発禁処分にながく幻の画家とされてきましたが根強いファンも。



箱櫃と秋田美人

⑮東山魁夷が見たかまくら

町人地の外町では、辻々に共同井戸があり、井戸の側にかまくらを作り水神様を祀りました。昭和10、15年頃にかけて建築家ブルーノ・タウトや若き日の東山魁夷が、かまくらの時季に訪れています。東山魁夷著『我が遍歴の山河』から「かまくら」の一節「こんな美しいものが、まだこの地上にあったのか（中略）しかし、さてこれを描くとすると困難な題材だな。美しいすぎるんだ。美しいすぎる（後略）」

横手花街 まちあるき



片野重脩（かたの しげなが）
横手町長、秋田県会議長、衆議院議員も務めた。戦後は公職追放から復帰後、羽後交通社長、秋田無尽（のちの秋田あけぼの銀行）社長、秋田銘醸社長、秋田放送取締役などを歴任。秋田政財界の重鎮。川俣家と片野家は徒歩数分。



全国花柳界を網羅したガイドブック『全国花街めぐり』（昭和4）によると、柳町と四日町が花街の中心で、21軒の芸者屋があり70名以上の芸者がいたと記されている。

参考資料 協力

1. 横手郷土史研究会『横手明治百年史 下巻（大正・昭和編）』（国立国会図書館所蔵）
「国立国会図書館デジタルコレクション」収録（<https://jpsearch.go.jp/item/digml-3451505>）
2. 森田博『横手ゆかりの文人・画人』月刊はたはた 収録
3. 小松和彦『蛇芸者哲子 花街から農民運動へ1〜4』
秋田魁新報電子版 新あきたよもやま（<https://www.sakigake.jp/news/article/20230622AK0039>）
special thanks. 小松和彦氏 / 小松クラフトスペース

蛇芸者 哲子

今から百年ほど前。大正から昭和初めの頃、横手の花街に蛇芸者と呼ばれる美しい女性がおりました。名は須磨哲子。青大将を懐に忍ばせてお座敷に出たという伝説が語り継がれています。

哲子は豪農の家に生まれましたが、父親が鉾山に家財をつぎ込み一家はちりじり。5歳の頃猫1匹を連れて芸者屋にもらわれてきました。

成長した哲子は、お座敷で豪遊する地主たちを翻弄。農民運動の先頭に立つ川俣清音（かわまたせいおん）に惚れて結婚。彼を代議士にするため、名伯楽ぶりをいかななく発揮しました。

彼女が居たころの横手城下この地に残るまちの記憶を手がかりにご案内して参ります。

須磨哲子（すまてつこ / 川俣哲子）

横手花街きっての名物芸者。18歳でミス横手に選出、芸者置屋の女将をしながら自らもお座敷にあがる。明治33年、雄勝郡駒形村大倉で、父阿部嘉右衛門の11人兄弟姉妹の真ん中に生まれる。父が鉾山投資に失敗し一家離散。横手町の芸者置屋の女将 須磨トメの養女となる。昭和5年、川俣清音と結婚。養子で衆議院議員を務めた健二郎は「明治、大正、昭和を 強きをくじき、弱気を助けて生き抜いた」と評す。



蛇の崎橋畔の鐘楼より鳥海山を望む

横手花街まちあるき

横手市の歴史文化遺産 横手花街まちあるき編

制作 まちづくり推進部文化振興課 / 発行 横手市



令和6年3月発行 初版

①きみまち橋

横手のお城は朝倉城あさくらとも呼ばれ、そこからこの町の芸者は阿桜美人(あぎくら)と持て囃されました。二ノ堰に架かっていた花街へ通じる橋で芸者がお客を待つ、恋しい人の帰りを待つというのをかけてきみまち橋と称されました。橋を渡れば遊郭であったことから親不孝橋とも言われました。

②馬口労町(ばくろまち)

花街の入口。馬口労とは、牛や馬のことに詳しく売買や調教に携わる人のこと。古代中国にいた馬の鑑定の達人伯楽(はくらく)から、はくらく↓ばくらく↓ばくろ。今でも才能を見抜く眼力のある人を名伯楽と言ったりします。『全国花街めぐり』(昭和4)によると、この町には、千歳楼、大黒屋、櫻屋、恵比寿屋の四軒の妓楼が記されています。

③横手劇場

大正8年、横手劇場が完成、こけら落としの歌舞伎興行は満員御礼の大盛況でした。犬養毅、後藤新平、尾崎行雄、浜口雄幸などの演説会場としても使われ、なかでも犬養は毎年のように町を訪れました。哲子は清吉の演説会でもお座敷で稼いだ花代で入場券を買占め彼を支えました。敗戦後、椅子席で千人収容の横手映画劇場に改装するも、昭和40年の大雪で屋根が落ち閉館しました。



横手劇場 外観



④横手町市街案内図(昭和8)

当時の店舗や個人宅の名前まで記されています。ここは四日町上丁、金喜書店や自由庵と記されているところです。哲子が営んだ芸者屋月の家は案内図が描かれた頃には店を畳んでいたようです。がこの界限にあったようです。

⑤料亭山田屋と石橋湛山

旧蛇の崎橋、四日町側にあった料亭山田屋は横手川を眼下に臨む好立地。ここで哲子は大正ロマンを代表する画家竹久夢二と出会います。18歳でミス横手に選ばれた翌年、ふたりは蛇の崎川原から打ち上げられる送り盆の花火を対岸のお座敷から眺めます。裏手の長屋にのちに首相となる石橋湛山が疎開していたのはまた別のお話はなし。

⑥桜鍋と有田夏子

蛇の崎川原のあたりには家畜市場がありました。馬肉は桜肉とも言われ桜鍋は精がつくというので花街の定番料理。大正11年の送り盆まつりでは、人気サーカス団有田洋行会が川原で興行します。一座の花形有田夏子は横手出身、故郷に錦を飾ったという話題でもちきりになりました。

⑦銭湯鶴の湯

中の橋の大町側、川沿いに鶴の湯がありました。一階が銭湯、二階がイス席のハイカラな食堂でした。となりの映画館とつながっていて、活動写真を楽しんだ後に食堂でくつろぐといった趣向。東北一の豪華銭湯というふれ込みで評判となり、対岸の根岸町まで行列ができるほどでした。

⑧ピリヤードと進駐軍

大町下丁、尾張屋呉服店となりに玉突場がありました。当時、話題にならず閉店してしまいました。台や道具類は、木村屋商店となりの蔵に仕舞われました。敗戦の年、米軍が駐屯し平鹿郡公会堂を兵舎にしたときのこと、町長の機転でまぎらった一式を兵舎に置きました。米軍が去った後、もぬけの殻で米軍が持ち去ったと話題になりました。

料亭山田屋 外観



銭湯 鶴の湯 対岸より



横手馬



横手町の大雪 四日町通り

⑨平利旅館

大正10年2月、哲子に逢うため夢二は雪の横手を訪れます。当時20歳そこそこの人気芸者と、16も年上の売れっ子画家との恋。4年後、夢二は恋人山田順子と連れて来訪。哲子は物陰から二人が泊まる平利の様子をうかがうのでした。恋は終わりを告げます。

⑩水木京太猫の話

平源となり、大町中丁の旧家七尾家の息子嘉太郎は哲子より6つほど年上。水木京太の名で知られる劇作家。猫好きで有名でしたが妻が猫嫌いだったことから猫が飼えず、古今東西の猫本を集めては猫の随筆を多数書き残している風変わり。蔵書は戦禍を逃れ、教鞭をとった慶應義塾大学の図書館に所蔵されました。

⑪石坂洋次郎と川俣家

小説『青い山脈』で知られる作家石坂洋次郎は、昭和13年に上京するまで旧制横手中学で教鞭をとりました。彼が町を去る日、哲子の息子健二郎と教子数人だけが駅で見送りました。洋次郎と哲子・静子は家族ぐるみの付き合い。のちに川俣家は洋次郎が住んでいた屋敷に移り住み夫婦の終の棲家となりました。

⑫高峰秀子と映画『馬』

ブルーノ・タウト著『日本美の再発見』(昭和14)により、横手のかまくらが世間に知られるようになった。四日町の朝市で映画撮影がありました。昭和を代表する大女優高峰秀子が、冬の朝市を歩くシーンが映像で残されています。主演の高峰秀子は当時17歳、映画の製作主任だった黒澤明と恋に落ち、当時マスコミをにぎわしました。

